

# 被災地のレジリエンス形成に向けての支援活動

担当教員名 辻 英史／武貞 稔彦

## 1 コースの概要

日 程	2014年8月6－10日（前半）・ 18－22日（後半）
場 所	宮城県石巻市北上町（仮設団地につこりサンパーク）
参加人数	前半4名、後半5名

## 2 コースの目的

農業支援を中心とした仮設住宅団地の復興支援

東日本大震災の被災地では仮設住宅での暮らしが3年目を迎えている。本FSではNPO法人パルシックを受入れ団体とし、石巻市北上町の仮設団地につこりサンパークを中心にボランティアとして作業をおこない、現地住民の方たちと交流しつつ震災復興の現状と被災地域のレジリエンス（回復力）の形成について学んだ。

## 3 事前学習

1. 外部講師として震災前から石巻市北上町をフィールドとして調査されている長崎大学の黒田暁先生をお招きし、北上町の地域の特徴、震災の被害状況、復興の状況とその問題点についてレクチャーを受けた。（6/28）
2. 現地で受け入れの責任者であるパルシックの西村陽子さんをお招きし、支援活動の内容について詳細な説明をいただいた。（7/23）

## 4 行程

被災地の復興は、①すまいの復興、②暮らしの復興、③地域社会の復興、という3つの問題群に大きく分けられる。このFSでも、これらの領域に接する活動をおこなった。①は住宅地の高台移転に向けた作業が中心になっており、これに直接関わることは少なかったが、大型トラックが行き交い、緑の山を削って住宅地造成が進む光景を目の当たりにし、また工事の遅れの話

耳にすることで、住民の合意形成の難しさを肌で感じることができた。②③に関しては、以下のように実際に支援活動に参加することができた。

### 1. 生業支援

地元の農業や漁業を再興することは復興活動支援の重要な一角である。

農業では、最近北上の地域住民が自ら育てた農作物を販売したり、加工して商品化しようとする動きが出てきている。参加者は仮設住宅に住む人々とともに農園の草むしりをおこない、またそこで採れた野菜農作物を販売する手伝いをおこなった。

漁業では、従来の個人経営とは異なり、数人の漁師が共同で事業をおこなう協業化がすすめられている。十三浜地区のワカメ農家や、協業による漁業を営む「鵜の助」を訪問し、漁具の手入れや清掃のほか、漁船に同乗させていただきホヤやホタテの収穫を体験した。

### 2. 学習支援

震災で環境が激変し、大きなストレスを受けている子どもたちへのケアは、子どもたちにとっても、その保護者の方々にとっても大きな意味がある。NPO法人日本冒険遊び場づくり協会とともに、北上小学校の裏山につくられたプレイパークで子どもたちと思いっきり遊んだ。また、ボランティア・グループ「レスキュー・キャット」とともに小中学生の夏休みの宿題の手伝いや、映画上映会、お祭りの手伝いなどの活動をおこなった。

### 3. 仮設住宅団地内でのふれあい・コミュニティ活性化

参加者は、十三浜地区の祭の食事の準備や販売、駐車場の交通整理などの作業に汗をかいた。また、につこりサンパーク内で活動するお母さんたちの小物づくりを手伝うこともあった。こうした作業の合間に、震災についての体験談を聞く機会もあり、そこでも学生たちは大きな刺激を受けた。

## 5 事後学習

1. 最終日に現地で教員とともにふりかえりをおこない、FSにおける印象や感想を整理し、反省点をまとめた。
2. 事後学習会では、被災地の現状と支援活動の状況について、またボランティアのあるべき姿について議論を深めた。(9/11)
3. 第39回法政大学大学院まちづくり都市政策セミナーのポスター・セッションにおいてパネル報告をおこなった(11/25)。
4. 学生たちが提出した最終レポートは、人間環境学部ホームページにて公開している。  
(<http://www.hosei.ac.jp/ningenkankyo/shinsai/index.html>)

## 6 雑感

このフィールド・スタディーは2011年以来毎年実施しているが、3年目を迎えて被災地の状況は相当に

変わりつつある。復興の進むなかでさまざまな問題を抱えている現状を目の当たりにすることが、学生たちにとって最初の大きな学びであった。

FSでおこなうボランティアの支援のあり方も次第に変化してきた。初年度のようなガレキの片付け、支援物資の仕分けといった仕事から、被災地の人々が新たな生業を作り出していくことに協力する、あるいは子どもたちを通じて地域社会の活性化に関与するといった活動が重要になってきている。

そのなかで、私たち外部の人間は被災地の方々にとどのように関わっていくべきなのだろうか。支援のあり方、またボランティア活動の意味をめぐって、学生たちは悩みながら活動を続けた。その答えは簡単には出ないものである。しかし、こうした支援活動の難しさ、被災地に関わり続けることの大事さの両方を、参加学生には十分理解してもらえたと思う。

最後に、例年学生を受け入れていただいているNPO法人パルシックに、この場を借りて御礼申し上げます。



「鵜の助」漁具の手入れを体験



農園で草むしりを体験



相川祭の手伝いを体験



ワカメ農家にて

## 学生の声

### 「一時的なボランティアの役割とは？」



2年 岩崎 咲穂

私は宮城県石巻市北上町の震災からの復興について考えるFSに参加しました。FSに行く前に事前学習の時間が何回か設けられていて現状を理解するのと何を学習しに行くかが明確になりました。また、事後学習では得た感情を発表する機会があるなど学習サポートがとても充実していました。

現地では農業、漁業、子ども支援といった様々なボランティア活動を通して参加者全員がたった数日間のボランティアで現地の方々役に立っているのだろうかという一時的なボランティアとは何だろうという感情を抱きました。しかし、このFSで得た感情を持って帰りこれから自分たちがどう行動していくのか、どう復興の状況を発信していくのかがこれから大切なことなのでありこのFSの意義であったと考えます。

FSは自分の頭の中で考えていたことをとことん覆しました。ぜひ興味のある分野のFSに参加してこの感覚を味わってください。また、FS後の学習を大切にしてください。